

目指す学校像	「認めて育てる」教育を推進する学校：児童の努力しているところを見つけ、児童の励みになるように認めて育てる指導を心がけるとともに、児童が自ら学び、行動する意欲を高め、児童の自己肯定感を育む教育を実践する。
重点目標	1 学ぶ楽しさ、喜びが味わえる授業（学習指導）の実践 2 安心・安全で心豊かな学びを保障する教育環境の充実 3 家庭・地域・関係諸機関との連携による教育の推進（コミュニティ・スクール） 4 一人ひとりが力を発揮し、誰もが居心地のよい（Well-Being）学校をつくる教職員研修の充実

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成 (8割以上)
	B	概ね達成 (6割以上)
	C	変化の兆し (4割以上)
	D	不十分 (4割未満)

年度		学 校 自 己 評 価			年 度 評 価		学校運営協議会による評価	
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	
1	(現状) ○全国学力・学習状況調査では、国語、算数ともに全国、県平均と比べ概ね良好な結果である。 ○市の学習状況調査において、学習に対する関心・意欲・態度に関する質問に肯定的な回答をした児童の割合は、市平均と比べ理科、算数でやや高く、国語、社会、G・Sでやや低い。 ○日頃の学習の様子から、意見交換や調べ学習等でタブレット型コンピュータを積極的に活用して学習に取り組む児童が多い。 (課題) ○全国学力・学習状況調査の結果分析から、習熟の二極化と、根拠や理由など自分の考えを表現することに苦手意識をもっている児童が多い。 ○学習内容の理解度に比べると学習への関心が高まっておらず、児童が学習の意義を実感できるようにすること、達成感や充実感を味わえるようにすることが課題である。	・学びの自律化に向けた情報端末の活用、授業改善 ・主体的に学ぶ楽しさを実感できる「桜木小版 STEAMS TIME」の策定	①全国学力・学習状況調査について自己採点して結果を振り返り、児童が学習状況を把握する。スタディサプリ等の取組状況を基に学習相談を実施し、児童が苦手克服に向けて目標をもって学習できるようにする。 ②ICTを活用し、自分の考えを表現する力を高めたり、児童同士で考えを共有して表現したりする授業を進める。(国語、社会、G・Sを中心に)	①児童が自己採点の結果をもとに自らの学習状況をつかみ、目標を立て、達成に向けて行動(スタディサプリ等の取組状況)したか。市学習状況調査の学習に関する項目において、80%以上の肯定的な回答が得られたか。 ②学校評価項目「授業内容・発表・質問」の児童の達成率や市学習状況調査の学習に関する肯定的な回答率が共に85%以上となったか。	①全国学力・学習状況調査や市学習状況調査の自己採点により、児童は結果を把握して自身の学びを振り返ることができた。市学習状況調査の学習に関する項目(中・高学年の5教科平均)において、82%の肯定的な回答が得られた。 ②児童の学校評価項目「授業内容・発表・質問」において平均88%、市学習状況調査のICT活用に関する項目において平均93%の肯定的な回答が得られた。	A	・今年度も6年生は目標値を達成しており、6年間を通して学びを充実させてきているといえる。引き続き、各学年の実態に即した指導を適切に継続していくことが大切であると考えられる。自分の考えを表現できる児童が増えていることは全教職員が実感しているが、学年・学級の共通した手立ての確立や、教員個々のICT活用力をさらに向上させていきたい。	・市学習状況調査においてどの教科も市平均を上回っているのは、これまでの取組の成果が表れていると言える。 ・児童の様子からもICT能力が高いことが分かる。1年生からの先生方の指導で力が身に付いていると考えられる。 ・評価項目の達成状況が非常に高い。「体験的な学習、問題解決的な学習指導」の肯定的な回答の割合が100%であるから、教職員が一生懸命な様子がよくわかる。体験的な学習や「STEAMSTIME」等、次年度以降も児童が学ぶ楽しさを実感できるような教育を期待している。
2	(現状) ○各種調査で、設問「学校に行くのが楽しい」に肯定的な回答をした児童の割合は高く、設問「自分にはよいところがある」では低い。 ○手洗い・換気・手指消毒、黙食を徹底し、行事における感染症対策も徹底した。各教室に二酸化炭素濃度チェッカーとサーキュレーターを配置してクラスター感染防止対策をしている。 (課題) ○毎日の保健室の利用状況は平均10人程度だけがと病気の割合が6:4(けが:病気)となっていて決して低い値とは言えない現状である。 ○児童の自己管理能力について課題を感じている教職員も多く、「健康について関心はあるが、けがや病気を未然に防ぐ」という点について児童の自覚や、指導の在り方等に課題がある。	・自己肯定感を育む、児童一人ひとりへの細やかな教育支援・相談に向けた校内体制の充実 ・いつも清潔、安心安全な居場所づくりと児童の自己管理能力を育む各種取組の充実	①情報端末を活用して児童向けアンケートや面談等の記録を蓄積し、児童一人ひとりの心身の状況を継続的に把握できるようにする。 ②教育支援・相談に係る校内委員会でICTを活用することで、蓄積した情報を基に児童の状況を細やかに把握、分析し、適切なタイミングで組織的に支援、相談を行う。	①学校自己評価の児童アンケートや市学習状況調査「生徒指導・自尊意識」において、関連する項目の肯定的な回答の割合が85%以上となったか。 ②学校自己評価の教員アンケート及び保護者アンケートにおいて、関連する項目の肯定的な回答の割合が80%以上となったか。	①児童の学校評価項目「ほめてくれる」において96%の肯定的な回答が得られ、市学習状況調査「自分には、よいところがある」において昨年度より1%向上した。 ②学校自己評価の教員アンケートの項目「教育支援・相談」において平均96%、保護者アンケートの項目「家庭への連絡」において85%の肯定的な回答が得られた。	A	・教職員間で「認めて育てる」という方針を具体化して共通理解できたことで、自尊感情の高い児童が増加した。しかし、学年・学級で指導や声かけ等にバラツキがあることも事実である。児童の行動をどうとらえてどう認めるかという点について、通知票の目的等も踏まえ、児童や保護者への伝え方を見直していく。	・児童の学校評価項目「ほめてくれる」が高い。「自分には、よいところがある」において、児童のよさや努力を見つけて意図的に褒めることや自己肯定感を高める取組を今後も継続して行ってほしい。 ・「学校に行くのが楽しい」の児童の割合が高いのは嬉しい。先生方は「認めて育てる」教育を実践されている。「褒めること」が大切。 ・環境整備における数値が意外にも低い。児童の安全、安心が第一。今後も学校・家庭・地域で児童を見守っていく。
3	(現状) ○昨年度にコミュニティスクール準備委員会を立ち上げて目指す児童像について熟議を積み重ね、自ら課題を見出し、協働して解決していく児童を地域全体で育てていくことを確認した。 (課題) ○共有した目指す児童像を、家庭・地域等に広め、地域に集う全ての人々と共有できるようにする。また、地域総がかりで挨拶等を通して顔の見える関係づくりを推進することで、地域全体の望ましい人間関係づくりや地域教育力の向上を目指し、児童を守る防犯・防災体制も整えていくようにする。 ○120周年記念行事もあることから、学校・家庭・地域全体で共有し、学校と地域、関係する諸団体との結びつきを確かなものにしていく。	・目指す児童像を地域全体で共有するためのICT活用、教育活動公開 ・トラブル等における適切な対応と地域総がかりによる挨拶を通した地域教育力の向上	①本校HP内に学校運営協議会及びSSNの情報発信するページを年3回作成・周知し、目指す児童像等を広く、家庭、地域と共有できるようにする。 ②地域懇談や育成会等に積極的に参加したり、地域の方を招いた給食試食会を実施したりして、学校の情報提供に努めると共に、要望等にも耳を傾ける。	①学校自己評価の保護者アンケートで、「コミュニティ・スクールに関する情報が適切に周知されている」と回答する割合が80%以上となったか。 ②学校自己評価の保護者アンケートで、「保護者や地域の方々に学校を知ってもらう努力をしている」と回答する割合が80%以上となったか。	①コミュニティ・スクールに関する情報を本校HPで発信するとともに、120周年記念行事に係る取組から学校・家庭・地域全体との結びつきを強めることができた。 ②学校自己評価の保護者アンケートにおける設問「保護者や地域の方々に学校を知ってもらう努力をしている」に肯定的に回答した割合が94%であった。	A	・育成会や周年行事等を通して児童と地域との絆を深め、顔の見える関係ができたことと実感している。次年度は3世代交流や自治会行事等の復活に合わせて児童と地域が繋がる場を広げ、学校の取組の周知も含め、学校と地域が協働して「地域総がかりの教育」を実践していく。	・評価項目の達成状況から、コロナ禍における取組ではあったが、昨年に比べて良い成果が見られる。次年度以降も様々な取組を期待している。 ・方策の評価指標と達成状況の整合性を考える必要がある。 ・学校に来ていない児童についての実態把握を確実にし、全ての児童が安心して通えるよう引き続き見守っていく。 ・様々な意見があるが、保護者からの評価も上がっている。今後もコミュニティ・スクールでの取組も含め、さらに情報発信をしていくとよい。
4	(現状) ○新たな学びのスタイルの中心となる、情報端末をはじめとしたICTの活用について、エヴァンジェリストが中心となり研修を重ねてきた。 ○教科担任制(第6学年)により、担当教科の深い教材研究を行うことができていく。 (課題) ○授業の中で効果的にICTを活用することについて、教職員間で取組の差がある。また、誰もが学び続けることのできる職場環境づくりが求められる。	・一人ひとりが力を発揮し、学校に集う誰もが居心地のよい(Well-Being)学校をつくる研修の充実	①年間を通して学期に1回以上、ICTの活用方法について、全ての教職員が学ぶ研修を実施する。 ②教科担任制(高学年ブロック)により複数教員で児童の様子を多面的にとらえるとともに、各教科の専門性を高めることで児童理解と授業改善を行う。 ③授業改善に向けて教員が目標を設定してICTを活用した個別最適な学びと協働的な学びに関する実践に取り組む。(1人1授業の実施)	①全ての教員が「個別最適な学び」の実現を目指し、日常的にICTを活用する状況になったか。 ②学校自己評価の児童アンケート(高学年)で、「授業の内容が、よくわかる」と肯定的に回答する割合が80%以上となったか。 ③全ての教員が授業改善を行い、学校自己評価の教員アンケート「研修」において、関連する項目の肯定的な回答の割合が80%以上となったか。	①全ての教員が日常的にICTを活用する姿がみられ、1月には都道府県・市教委等の視察対応で全学級が授業公開を行った。 ②学校自己評価の児童アンケート(高学年)で、「授業の内容が、よくわかる」と回答した割合が99%、「教科担任制の授業がよい」と回答した割合が96%であった。 ③各学年で個別最適な学びに関する授業を行い、実践報告を作成した。学校自己評価の教員アンケートにおける「研修」項目の肯定的な回答の割合が平均96%であった。	A	・学級経営や教科指導等における個々の悩みや課題等を適時共有し、主体的な研修の充実を図る。ICTの効果的な活用方法については、エヴァンジェリストが中心となり検討・周知していく。働き方改革や授業改善の視点から、学校評価をもとに来年度は学年内教科担任制を実施する。児童・教職員共に居心地のよい時間を共有でき、Well-Beingな学校に少し近づいたと考えられる。	・働き方改革の視点を大切にしながらも、今後もICTの効果的な活用方法を含め、全教員における学級経営力・授業力の向上に期待している。 ・児童、保護者、教職員ともに評価が高いことは嬉しい。次年度以降も、一人ひとりが力を発揮し、学校に集う誰もが居心地のよい(Well-Being)学校づくりを進めてほしい。

学校運営協議会による評価

実施日令和5年2月24日

学校運営協議会からの意見・要望・評価等

